



わたしと吉都線

通学の思い出、車窓から見える青々とした山並み、季節ごとに姿を変える田園：思い出や記憶に残る景色は人それぞれですが、吉都線への愛情はあふれんばかり。4人の話に耳を傾けると、きつと吉都線の歴史がもつとよく分かるはず。



Interview

ながむらよういち
永村洋一さん (69)

青春時代の思い出は、
通学で使った吉都線

昭和34年、私が都城の高校に通学するころ、吉都線高原駅から都城駅間を利用していました。当時、列車は蒸気機関車で、毎朝6時40分頃発の列車に乗り込むため、改札口を通らず直接線路から一番後ろの列車デッキにつかみ乗りしていました。そこで、車掌さんに怒られていたことを思い出します。また、近くの座席の人が窓を開けていると、汽車の黒煙で顔が黒く汚れていたこともあり、制服、制帽をきちっと着た高校生らしい姿で、ふざけあいながらも、仲間と行き帰りの通学を楽しんでいました。



毎日楽しく通学した学生時代に、友人が撮影してくれた一枚【手前が永村さん】



Interview

ひるかわ
蛭川ユミさん (68)

多くの友人たちの
門出を見送った小林駅

私が中学校を卒業した昭和35年ごろ、日本経済は上昇期で、私の友人たちは「金の卵」と讃えられ、都会へ就職のために旅立ちました。場所は小林駅。それぞれの就職先で出発の日が違い、私は、そのたびに紙テープや手紙などを持って、友人を見送りに行きました。汽車の窓から顔を出す友だちに紙テープを渡し、涙ながらに声をかけ、汽車が走り出すと、別れの悲しさとは裏腹に、色とりどりの紙テープが、とてもきれいでしたね。今でも、小林駅へ行くと、友人と別れを惜しんだあの時を思い出します。



就職のため旅立つ友と小林駅にて。【見送る蛭川さんは2列目左から2番目】



Interview

やすたけ
安竹夕エ子さん (65)

懸命に働く貨物列車を
応援した子どもころ

私が小学校低学年のころの思い出です。私の実家は、売子木の線路沿い（ちしよのき）にありました。西町～売子木間は、上り坂で、多くの荷を積んだ貨物列車が、きつそうに音を立てて登ってきました。しかし、私の実家の付近で登りきれずに止まり、今度はゆっくりバックし始めたのです。そして、西町あたりから勢いをつけて登り、西小林駅に向かう光景を時々目にしました。子どもながら、貨物列車も懸命に働いているのだと思ったものです。もう貨物列車を見ることはありませんが、これからの吉都線がずっと続くことを願っています。



子牛や木材など、多量の積荷を運び活躍していた貨物列車



19歳の藤崎さん

Interview

ふじさきまさき
藤崎正紀さん (79)

高校卒業後、国鉄に就職。車掌などで活躍。
同僚に自慢した吉都線の車窓

戦後の小林市の通学は列車以外にありませんでした。私が利用していたのは、朝7時30分ごろ、西小林駅を発車する列車でした。駅に駆けこむと、車両は通勤通学の人で満員になっていました。列車は旅客車と違って、縦に横に揺れが激しく、そのたびに「ワー」、「キヤー」と声があがり、倒れる体をみんなで支えあったものです。

卒業後、私は国鉄の職員になりました。短い期間でしたが吉都線にも勤務しました。吉都線は、平野部を走り、トンネルもなく、霧島連山などの素晴らしい景色を眺められ

るので、価値があると思います。私北九州の職場にいたころ、同僚が「肥薩線は山がきついが、吉都線に入ると眺めが良く爽快だな」と言ったとき、「そうだろう」と鼻を高くしたものです。小林駅では、積み荷の貨車の引き出しや、機関車の誘導、構内の列車の編成作業などに汗を流しました。その時の姿が、線路などを見ると思い出されます。今では、日本各地のローカル線もその特色を生かして地域振興に生かされていますが、吉都線も「霧島を麓から見上げて走る吉都線」などと声を高らかに走ってもらいたいものです。



19歳で就職し、最初に働いた福岡県の臼井駅



新幹線の車掌となり、伊勢神宮に参拝する首相を先導するなど活躍した【東京駅】

